



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

母親たちに...

【わたしは主にお仕えする者です。お言葉どおりに、この身に起こりますように】

ルカによる福音書

1:38

生命を破壊し、母親としての存在を否定する中絶を望む母親が、毎日現れることを思うと、すぐにこの聖母マリアの言葉を思い出す。

妊娠におびえ、その結果中絶をしようと考える母親たちとマリアが一言でも話すことができたならば、一人一人の母親とマリアのこの誠実な信仰を分かち合うことができたならば...。信仰深いマリアは、

救い主の誕生のためならどんな苦しみも、どんな屈辱も耐えることができた。と聖書には書かれている。しかし今日の現状は、恥ずかしさや不便さや経済的負担を避けようとして、子供を墮ろしてしまう母親が実に多い。なんと悲しいことだろう。

母親というのは、欠けてしまつては世界が存続することのできない大事な存在である。どんな犠牲にも属することなく、子供に生命を与えることを選んだ母親たちに私は拍手を送りたいと思う。なぜなら、与えることによって与えられ、愛することによって愛されるのだということとを、誰にもまして母親たち

ちがよく知っているからである。

この12月という特別な月に、皆さんが毎日少しでも、自分の子供を死に追いやろうとしている母親たちが思い留まるように祈りを捧げてもらえたらと願っている。

母親たちが神の意志を受け入れる勇気を与えられるよう祈り、彼女たちが、子供を生むという不屈の精神を養えるよう祈りたいと思う。

マリアの信仰のメッセージを世界中の人々に、特に自分の体内で成長している生命の奇跡があることにまだ気付いていない母親たちに伝えていこう。

苦しんでいる母親たちに中絶を考えさせるのではなく、確信をもって神に頼り、神のお造りになった新しい生命を大切にしよう願わずにはいられない。

『生命の息吹』

一般に健康な女性の体内でつくられる卵子は平均して1ヶ月に一個、女性の一生に換算すると、四百個以上の卵子がつくられる計算になる。一方成熟期にある男性の体内では、一般に数え切れない程の大量の精子がつくり出される。この大量の精子が性交を通して女性の体内に送り込まれ、そこで卵子を求めてさまよふのだ。この精子と卵子はそれぞれ独立した存在で、ある意味ではそれぞれが『生命』を持つているといえる。しかし、その比率が大量の精子に対して卵子が少量であるため、両者が遭遇する可能性は低く、卵子に出合えなかつた精子は死んで体内に残る形になる。一方、この精子と卵子がめぐり合った場合、その瞬間から新しい生命が始まるのだ。

精子と卵子が何10万分の1の可能性で出合い、新しい人間の細胞が生まれる。これは生命の神秘、奇跡と言えるだろう。この奇跡は精子と卵子、個々では起こり得ない。両者が遭遇、合体して初めて起こる奇跡。人の一生の中でも最も美しい瞬間である。しかし残念なことに、今日その素晴らしい瞬間を単なる人間の体内に組み込まれた様能と解釈する見方が広がっている。最悪なケースとしては、それを不運にも起こってしまったハブニングで済ませてしまう人さえおり、大変残念なことだ。

この二つの間にあるものは何だろうか？それは、時間だけだ。時間は絶えず流れている。一つ一つ個別にみえる出来事も、実はこの時間という媒体でつながっているのだ。この見方に立てば、人が幼稚園に入园した日から卒業式を迎える日までの経過も、受胎の瞬間から18歳の誕生日を迎える日までの経過も、基本的に同じことである。存在するのは「時間の流れ」という概念だけだ。『受精』それは、神が新しい生命に息吹を与える瞬間である。科学の進歩とともにその説明が進んでいるにもかかわらず、その正体は今だに神秘のベールに包まれた部分が多い。しかし、確かに言えることは、その起源は精子と卵子が出合を求めてさまよう時点に遡るということである。受精は、新しい生命が芽生えるまさにその瞬間である。

胎児の発育をどのようにとらえるか。

新たな生命の誕生は、奇跡の瞬間としか言いようがない。受精で誕生した個々の生命と全く同じ人間は、もう二度と生まれることがないのだから。人間は、一人一人が唯一無二の存在で、自分と完全に同一な人間は存在しない。そして、その生命は、受精の瞬間から始まる。つまり、母体内にいる時から完全な人間であると言える。

聖書では、生命の始まりをどのように説明しているのか。

エレミヤ記によると、我々が母親の子宮内に生命を宿す前から、神は我々のことをよく知っている。神は、受精以前に我々の髪の毛の本教まで知り尽くしている。歴史上、これまでに存在した人も、これか

ら生まれるだろう人も、すべては神の遠大な計画のもとにすすめられているのだ。この事実は、中絶が恐るべきものであるということを示している。中絶とは、再生不能の貴重な生命を亡きものにしていくのだ。

生きる権利とは、宗教倫理にのみ基づくものなのか。

かつて私は、子宮内における人間の発達について解説を求められた。そこに書かれている生物学的事実を読すれば、次の二つのことを改めて確認できるだろう。つまり、科学によつて人間の成長の仕組みが解明されたということと、第一に宗教では、神が人間の創造という偉業を成し遂げていると説いている。人は皆、神から生

きる権利を与えられているのだ。もし私が、生命の

始まりについて宗教的信念を持つていなければ、ここまで積極的に生命維持、尊重運動（中絶反対派）に荷担することはできなかっただろう。神の存在と、その力がなければ、生命は存在し得なかった。聖書の中で神は、神の姿を想像し、その肖像を作りだしたのは人間であると述べている。換言すれば、中絶によつて新しい生命を亡きものするというのは、神の創造活動を阻止しているに他ならない。

もしも私が、人道主義を唱える俗人で、神の存在を否定して自分自身の力だけを信じる人間だったならば、自分と全く無縁の生まれてくる小さな生命を守るために、こうまでも努力して生命尊重運動を進めようなどと考えもしなかったことだろう。

もし、論理的にでも感情的にでも、創造主としての神の存在を認めない立場

を取るとすれば、自分自身も含めて人間を、鯨や魚などその他の動物と同じように扱うこともできるようになるだろう。鯨も、中絶による人間の減少と同じ速度で現在減り続けているならば、全滅の危機から救おうという動きがとつくに起こっているだろう。

生命尊重派の立場としては、次の二つのことを前提に進めていく責任がある。

人間は、神の姿を型どり、神に似せてつくられた固有の独特な存在であるから、他のどの動物よりも尊重されるべきだ。

社会、政府、今日の世の中で起こっていることの全てにおいて、我々人間が主導権を握るべきである。残念なことに生命は軽視されている。

国内ニュース

中絶で20万人死亡

米民間団体のワールドウオッチ研究所は、世界で年間5千万件の中絶が行われ、20万人の女性が死亡しているとの報告を発表した。

報告によると、世界人口の75%に当たる人々に対して医学的、社会的あるいは経済的な理由で国が中絶を合法化しているが、アフリカ、中南米、イスラム教国のアジアなどの発展途上国では医療施設が十分でなく、中絶による死亡件数も多い。

途上国では子供が多いため既婚者の中絶が多いのに対し、先進国では十代から二十代前半の女性が子供を持つ時期を遅らせるために中絶しているのが特色。報告は、調査方法や対象、調査実施時期など

については特に触れていない。

報告は、中絶を合法化している国の方が中絶件数、中絶による女性の死亡件数とも少ないと指摘している。

高知新聞7月16日付

『中絶時期短縮の理由』

いずれにしても、何よりも問題なのは、優性保護法に定められている母体の生命の健康の保護がほとんど考慮されることなく、胎児の生育限界と周産期の定義の改定だけを理由に、早急に決められてしまったことです。

大村清

厚生省は、中絶時期短縮の理由の一つとして、優性保護法によって、中絶できるのは、胎児が母体外でその生命を継続できない時期」と定められており、こ

れは医学の水準向上と共に変化するものだと述べています。

私たちが、中絶に反対するのは、医学の水準向上の如何にかかわらず、胎児は人間であり、胎児の生命も母親の生命も同じ重さ、同じ価値があると信じるからです。

プロ・ライフ

国際ニュース

「東西ドイツ

中絶問題で対立」

ドイツ国民が統一へと向かう中で、中絶に関する法律が他のどの問題よりも論議を呼び、東西ドイツの人々を隔てている。東ドイツでは中絶率は全妊娠中の37%であるが、西ドイツではおよそその半分である。

西ドイツでは中絶する

には健康上、社会上の適切な理由があり、二人の医者から承認を受けなければならぬ。そしてカウンセリングを受け三日間待たなければならぬ。東ドイツでは必要に応じて政府が無料で中絶を施行させている。これは一九七二年に国家によって定められた権利の一つである。

キリスト教民主同盟が今交渉に当たっており、西側政府は東にも適応されるような制限つきの胎児の保護政策を望んでいる。

「知恵遅れの人々に対して去勢を強要」

中国北西部のカンシュー地方で、知恵遅れの人々の去勢を求める法律が承認されて14ヶ月になる。法律が施行されて以来、その規定に当てはまる去勢手術が500件行われた、と5月20日に発表された公式レポートが伝えている。カ

ンサーの政官たちは、彼らの最終目標は年内にその地区で推定される26万人の知恵遅れの人々のほとんどを去勢することであると云っている。この報告は人民日報紙による。

「胎児の交通事故死認められる」

シズリー裁判所は交通事故による流産で死亡した胎児の件を認めた。本法院では、先の下級裁判所での判決を覆し、カンザスティのランボー夫妻が、交通事故により3ヶ月の胎児を流産したことについて、相手方の運転者を訴えることができるとした。さらに進めば、公判で胎児の権利が法的に承認されることになるだろう。

読者の声

「何も思わない人……」

今、老化を防ぎ、しわをのばす高級な化粧品品の宣伝に、天然コラーゲンとか生体コラーゲン配合とかありますが、それは、胎児とか胎盤から出来ているというのを聞きました。業者の人そういうものを病院からもらって（買う？）いるそうです。それをすりつぶして、クリームにするのだそうです。少し前、テレビで胎児をミイラにして、それをイヤリングにしている人を見ました。小さな無抵抗な者の生命を奪うことに対して、何も思わない人、多いですね。中絶で取り出された胎児、オギャアと泣いたり、看護婦の目を見つめたりする子もいるそうです。とにかく多くの子供は生きていて、看護婦はティッシュを

ぬらして顔にあてて窒息死させるか、裸のまま汚物を入れるトレーに入れられたまま放っておくそうです。保育器に入れれば、もしかしたら助かるのに。やはり胎児には生きる権利があると思います。そうして、胎児を殺す権利はだれも持っていません。胎児は神様のものです。

（堀田好江）

『墮胎児売買』

オーストラリアの科学雑誌「イカルス」の「胎児売買」に関する特集記事を引用した驚愕レポートを読みました。

なぜ墮胎児が売買されるのでしょうか。これによると、つやつやはちきれんばかりの赤ん坊の皮膚は、コラーゲンというタンパク質によるもので、コラーゲン入りのクリームを塗れば、衰えた皮膚もみちが

見。

えるほど美しくなるという。そこで「イカルス」の記者が、化粧品会社の社員になりすまして、墮胎児売買をしているという病院に潜入した。「イカルス」の記者はクリームを作るためにと言って墮胎児一体300シリング（約3500円）で取り引きしたそうだ。オーストラリア以外での実態報告も出ていたが、一九七五年〜七六年7月までの間に130回におよび日本の航空会社の輸送で韓国からアメリカに433個の冷凍容器が送られていた。中身は墮胎児の腎臓であった。6年間にわたって毎年数千個の墮胎児の腎臓が韓国からアメリカに空輸され、その一部は陸軍生物兵器研究基地に送られていた。（これは日本の国会でも取り上げられた）81年3月、ルーマニアからフランスの化粧品メーカーに送られる冷凍輸送車の中から人間の胎児発

「世界の墮胎」

1988・8・15

辻幸子氏の文より抜粋



《事務所だより》

クリスマスももつづく。今年もあつという間に過ぎてしまったように思います。この一年、世界的にも大きな出来事がいくつもありました。「時の流れ」

ました。小さな歩みの中にも神様の働きを感じます。この世界には様々な問題があります。私たちは真の兄弟姉妹、地球家族として、全ての生命を尊ぶことから出発点ではないでしょうか。

を感じます。時の流れの中で、母親の在り方も、家族の在り方もどんどん変わっていく……。この師走という忙しい時期にこそ、色々なことの中に「これでいいのだろうか」「私たちが本当に求めているものは何だろうか」と、足を止めて考えてみたいと思います。この寒い冬に私たちが暖めてくれる様々の便利な「もの」たち……。でも、

この一年も本当にありがとうございました。小さなことの中にも心をこめて、新しい出会いを期待しながら、この一年のすべてに「ありがとう」。そして来年もどうぞよろしくお願いたします。

12月15日

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ一同

私たちは本当に暖かいのだろうか。私たちが本当に幸せにしてくれる暖かさだろうか……。今年も「正義と平和協議会」の全国大会に参加しました。ネットワークづくりでは、数名の方が熱心に話されていき